The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者における依頼表現 : ストラテジーの使い分けを中心として
Author(s)	ナカミズ, エレン
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1992, 26, p. 49-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語学習者における依頼表現

―ストラテジーの使い分けを中心として―

エレン・ナカミズ

1. はじめに

日本の国際化とともに、外国人が日本人と日本語で話をする機会も多くなった。そこでは、ノンネーティブスピーカーとネーティブスピーカーの言語運用の間に差があるため、相互間の円滑なコミュニケーションに支障が生じる可能性が高い。文法と語彙を習得しており、ある程度まで自由にコミュニケーションができる外国人学習者でもことばの社会的なルールに違反することがまだ多い。この問題に伴って、異文化間コミュニケーションと第二言語習得に関する研究は日本語の世界でも最近増えてきている。

発話行為は人間の相互作用の最も重要な部門の1つであって、異文化間コミュニケーションと第二言語習得にかかわる研究に欠かせないテーマである。発話行為の研究は80年代から世界的に増えてきたが、日本語ではまだ少ないと言える。本研究は、外国人学習者が行う依頼発話行為（request speech acts）におけるストラテジーをテーマにする。依頼発話行為を成功させるためには、その依頼の場面にふさわしい表現を使うべきである。どの言語でもものを頼むことは聞き手に迷惑をかけ、自分のメンツをつぶす可能性がある行為である。そのため、それを成功させるには、その言語のことば遣いに関する深い知識が求められる。それゆえ、依頼発話行為は外国人学習者にとっても、最も習得困難なものの1つである。

学習者には自分の言語・文化の背景があるため、日本語で依頼をする際に自分の言語と文化からのルールを転移する傾向がある。転移は学習者の誤用の重要な原因であるが、一方、一般に違う文化的な背景を持つ学習者の間には、共通するストラテジーや誤用が見られる可能性がある。そこで、外国人学習者のストラテジーの使い方を調べるため、中国人、韓国人、アメリカ人の日本語学習者を対象として、依頼に関する調査を実施した。同時に日本人話者も対象とし、両者の使うストラテジーを比較した。ここでは、日本語による依頼発話行為の問題点や難しさを、少しでも明らかにしたいと思う。

2. 発話行為とは何か

現在までの発話行為に関する研究では、発話行為とは人間におけるコミュニケーションの最小単位であると定義されている。ことばを話すことは、陳述、命令、質問、約束、依頼などの発話行為を遂行することに一致するという (Searle, 1969)。話者が意図なしで言語形式を使うのではなく、言語形式を通じて意図のある行為を行うのである。その行為を発話行為と呼ぶ。

発話行為は、その行われた文脈の状況によって、意味が決まる。例えば、「寒いですね」という発言は、文脈によって断定になる可能性もあるが、話し手と聞き手が窓が開いている部屋にいる場面であれば、聞き手に対する「窓を閉めてくれ」という依頼になる可能性もある。発話行為の意味は、ことば（言語形式）通りの意味にあてはまらない場合が多い。サールが述べたように、“often we mean more than we actually say”（「多くの場合、人間の伝えたいことは話していることばの意味を越える」）。ここで、発話行為の「間接性」という概念が重要になってくる。依頼発話行為の場合でも、直接的依頼発話行為と間接的依頼発話行為という区別が生

ずる。依頼の意味を持っていない言語形式を使って、上の例文のように依頼を間接的にすることができるからである。その時には、話者の選ぶストラテジーの範囲が広くなる。この問題点については、4.2で述べることにする。本稿では、サールの理論を参考にして、第二言語習得における依頼発話行為を扱いたいと思う。

3. 調 査 方 法

1991年7月から11月にかけて調査を行った。日本人の大学生（30人）と日本の大学に通っている中国人留学生（22人），韓国人留学生（15人）、アメリカ人留学生（17人）を対象として、個人的に調査用紙を渡し、その場で答えてもらった。得られた回答の内容を確認するために、直接何人かのインフォーマントに会って、口頭で質問した場合もあった。

アンケートを作る際に要因として設定したものは次の3つである。

Ⅰ）親疎関係：話し手と聞き手との親しさの度合は、どのように依頼の仕方に影響を与えるのであろうか。

Ⅱ）非対称的な関係：聞き手が目上の人である場面に出てくるストラテジーは親疎関係だけが要因になっている場面のストラテジーとどう違うのか。

Ⅲ）依頼の負担：依頼の負担の高低によってインフォーマントがどのようにストラテジーを使い分けているのか。アンケート調査の各依頼に一番頼みやすい依頼から一番頼みにくい依頼まで順番に並べるようにインフォーマントに頼んで、補充調査を行った。

本稿で分析したアンケート調査の質問項目は次のとおりである。

場面1、2：あなたは昨日気分が悪かったので、大学の講義を休みました。その講義のノートを親しい日本人のクラスメートに貸してもらうように頼

みたいと思っています。その時にあなたはどうしますか（親しくないクラスメートの場合は場面２）。

場面３、４：明日あなたは大学の授業で発表する予定でしたが、週末に友達があなたのところに遊びにきたため、発表の準備ができませんでした。そこで、発表の日を延期してもらうように先生に頼みたいと思っています。その授業の先生はあなたとあまり親しくない日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか（親しくしている先生の場合は場面４）。

場面５：大学のレポートを書くためにあなたの先生の部屋にある本を貸してもらうように先生に頼みたいと思っています。その先生はあなたと親しくしている日本人の先生です。その時にあなたはどうしますか。

場面６：あなたはひどい風邪をひき、２週間入院することになりました。少し前に旅行をした時、お金を使いすぎたので、今入院費を払うお金を持っていません。親しい大学の友達に５万円貸してもらうように頼みたいと思っています（１カ月後お金を返すと約束する）。 その時にあなたはどうしますか。

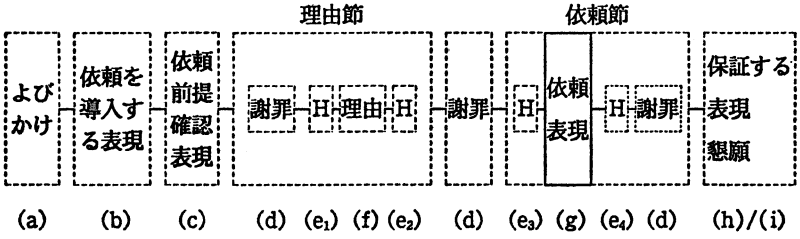
4. 結果と解釈

4.1. 依頼発話行為の全体の枠組

日本人話者と外国人学習者の回答に基づいて、依頼発話行為を構成するストラテジーをとりあげる。これらのストラテジーの組み合わせによって、依頼発話行為が展開されるわけである。

「依頼表現」以外の要素はすべて常に現れるとは限らない。「依頼表現」以外の要素は依頼の負担を弱めるストラテジーであるため、依頼を支持するストラテジーとして扱う。依頼を支持するストラテジーは図１に示

図1



したとおりである。

a．よびかけ　　e．hedge（ぼかし表現）

b．依頼を導入する表現　　f．依頼の理由

c．依頼前提確認表現　　h．保証する表現

d．謝罪　　i．懇願

上のストラテジーは日本人話者と外国人学習者、いずれの場合でも同じ順序に出てきた。この順序が日本語による依頼発話行為の典型であると思われる。

（1）○○先生、／○○日に発表が当たっているんですけど、／用事が
（a）　　（b）
あって、どうしても準備が出来なかったので、／申し訳ないのですが、
（f）　　（d）
／発表の日を延期していただけないでしょうか。（NF20、場面2）[1)]
（g）

（2）あの……ごめんやけど／○○の議義のノートとってあったら、／
（d）　　（e3）
ちょっとのあいだ／貸してくれへん？／なるべく早く返すわ。（NF3、
（e3）　　（g）　　（h）
場面1）

（3）お願いしたいことがあるんだけど／2週間入院しなきゃならない
（b）　　（f）

が、５万円の料金がないんです。／お願いできないでしょうか。（A
（g）
F、場面10）

（4）○○さん、／昨日ちょっと風邪で休んだから／ノート貸してくれ
（a）　（f）　（g）
ない。／ごめんなさい。（CF４、場面１）
（d）

（5）○○君、／実は／今、風邪がひどくて、入院中なんだ。でね、入
（a）　（e_1）　（f）
院費がちょっと足りないんだ／けど／ちょっと／貸してもらえない／
（e_2）　（e_3）　（g）
かな。５万円ぐらいだけど。（KM11、場面10）
（e_4）

これらのストラテジーの典型的な順番は上の図に示したとおりであるが、この順番は入れ換えることができる。

（6）○○ちゃん、悪いねんけど、／ノート貸してくれへん？／昨日、
（a）　（d）　（g）
私休んじゃってん。（NF８、場面３）
（f）

次の節では、依頼発話行為の枠組を表す図１の「依頼節」内部に焦点をあてて、その内部にある「依頼表現」を分析してみたい。

4.2.　「依頼表現」の着眼点

ここで、「依頼表現」と呼ぶのは依頼発話行為の中心であり、話し手が聞き手にしてほしいことを表す部分である。

アンケートで得られた回答に出てきた「依頼表現」を次のカテゴリーに分けた。カテゴリーの設定は「依頼表現」の間接性の度合の高低に基づくものである。

図2　1. 願望表現
　　2. 聞き手の都合を聞く表現　［慣用的間接的依頼表現］
　　3, 直接的依頼表現

「願望表現」とは話し手の意志を伝える表現である。

（7）発表の日を延期していただきたいんですけど……（NF4、場面3）

「聞き手の都合を聞く表現」は2つのカテゴリーに分けることができる。ひとつは「自分の動作を中心にする表現」である：

（8）○○をお借りしてもよろしいでしょうか。（NF12、場面5）

もうひとつは「聞き手の動作を中心にする表現」である：

（9）ノート見せてくれませんか。（NM5、場面2）

そして、「直接的依頼表現」[2] とは次のようなものである。

(10)ノート貸して。（NF12、場面1）

ここで注意しておきたいのは「願望表現」と「聞き手の都合を聞く表現」は慣用的な間接的依頼表現（“conventional indirect requests”）として扱っているということである。慣用的な間接的依頼表現とは、この表現が持っている本来の発話内的な力[3] とは違う発話内的な力を持つようになったものである。その場で新しく表現された意味は慣用として母語話者全員に理解されるのが一般である。このような表現は他の言語においても見られる。日本語と英語の依頼表現の例を比べてみよう。

「願望表現」

(11)昨日休んだ分のノート見せてほしいんやけど。（NM5、場面1）

I'd like to borrow your notes for a little while." (Blum-Kulka, 1989)

「聞き手の都合を聞く表現」

(12)ノート貸してもらえますか。(NM6、場面12)

Can you pass the salt? (Brown & Levinson, 1978)

(11)の例はどちらの言語でも形式上「願望表現」であり、話し手の要求を表すものである。(12)の例は日本語では自分が聞き手から恩恵を受ける可能性を聞くものであり、英語では聞き手の能力を聞く質問文である。しかし、例の意味は、それぞれの言語で慣用的になったため、それぞれの言語で依頼としてしかとらえられない。

次の例を見てみよう。

(13)読ませていただきたい本があるんですけど、／お借りしていいですか。(NF10、場面5)

(13)の例のように「願望表現」と「聞き手の都合を聞く表現」が共起する場合では、「願望表現」がとらえ方によって依頼の「理由」になる可能性がある。「願望表現」は、「理由」と「依頼」との境界線に位置付けられる表現であると考えられるが、本稿では慣用的な間接的依頼表現として願望表現を扱うことにする。さらに、表現の間接性の度合については「聞き手の都合を聞く表現」よりも「願望表現」の方が間接性の度合が高いと思われる。それは、「願望表現」と「聞き手の都合を聞く表現」が共起する場合、聞き手の都合を聞く前に自分の願望を表すという順番が普通だからである。

今回のアンケート調査での回答として出てきた様々な依頼表現は次のようにまとめられる。

願望表現

- V[4] ＋ たい形（＋ けど、が）
- V ＋ ほしい（＋ けど、が）
- V ＋ もらいたい（＋ けど、が）
- V ＋ いただきたい（＋ けど、が）

聞き手の都合を聞く表現

- ……わけにはいかない
- V ＋ いただけない
- V ＋ いただける
- V ＋ いただかない＊[5]
- V ＋ いただく＊
- V ＋ もらえない
- V ＋ もらわれへん、もらえへん
- V ＋ もらえる
- V ＋ もらわない＊
- V ＋ もらう＊
- V ＋ くれない
- V ＋ くれへん
- V ＋ くれる
- ……てもよろしい
- ……てもいい
- ……できない
- ……できる

直接的依頼表現

- V ＋ ください
- ……て

この分類に基づいて、日本人話者と外国人学習者が様々な場面に応じて依頼表現をどのように使い分けているかをアンケートによって調べた。

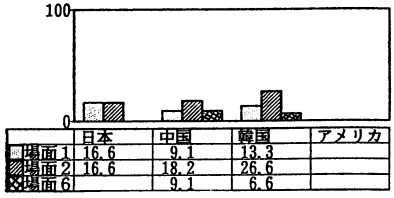
5. アンケートの分析

アンケート調査の6つの質問項目の条件によって、使用された依頼のストラテジーを検討する。上の6つの場面においての親疎関係、非対称的な関係（目上など)、依頼の負担、この3つの要因によって、基本的に次のストラテジーが使い分けられている：語形の切り替え（くれない→もらえない、あるいは、願望表現→聞き手の都合を聞く表現)、肯定形・否定形の切り替え（くれる→くれない)、「常体」と「丁寧体」の切り替え（くれない→くれませんか)。

これらをここで観察したいと思う。まず、グラフ形式でもっと具体的にアンケート調査のデータを示そう。

Graf.1：願望表現／聞き手＝同等の者

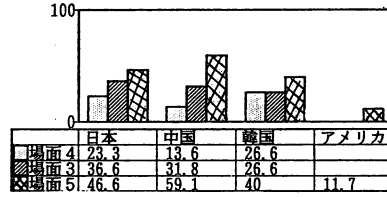
(単位：%)



	日本	中国	韓国	アメリカ
場面1	16.6	9.1	13.3	
場面2	16.6	18.2	26.6	
場面6		9.1	6.6	

Graf.2：願望表現／聞き手＝目上の者

(単位：%)



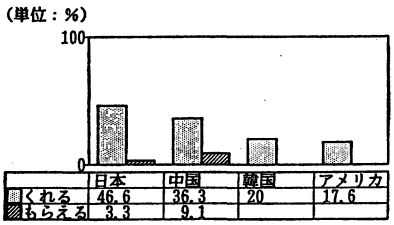
	日本	中国	韓国	アメリカ
場面4	23.3	13.6	26.6	
場面3	36.6	31.8	26.6	
場面5	46.6	59.1	40	11.7

全体的に「聞き手の都合を聞く表現」（～くれない、もらえない、～いただけませんか等）の方が多く使われて、願望表現は少なかったが、先生が聞き手である場面（4、3、5）では、願望表現を使う割合が高いことがわかる。グラフ1が示しているように、聞き手が同等の者の場面では、願望表現の使用はあまり見られない。先生に発表の日の延期を頼む場面より、もっと負担の軽い場面⑤（先生に本を貸してもらう）で親しい先生にもかかわらず、「願望表現」が多く使用されている。このことから聞き手

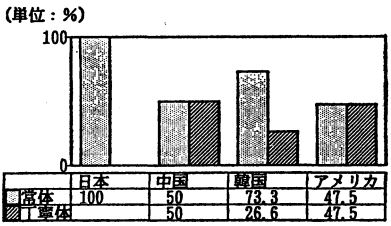
の地位と同時に、依頼の負担も表現の選択に影響を与えていると思われる。

先生に発表の日の延期を頼む場面③と④に関する結果[6]では、親しさの度合が変わっても、ともに聞き手が先生であるため、表現の丁寧さのレベルが安定していることが明らかになった。また、日本人話者と外国人学習者、いずれの場合とも、「いただく」＋「丁寧体」を用いる表現が一番多く見られた。切り替えがなくてもよいという状況は、外国人学習者にとってストラテジーの選択の負担が軽いことを示している。

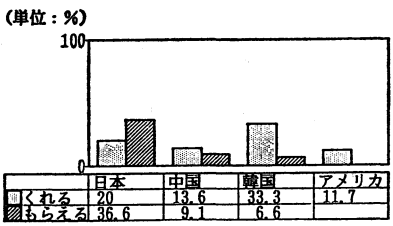
Graf.3：「くれる」・「もらえる」の否定形
場面①：親しいクラスメートにノートを借りる



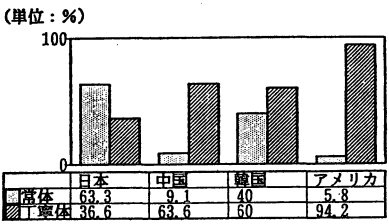
Graf.4：「常体」・「丁寧体」
場面①：親しいクラスメートにノートを借りる



Graf.5：「くれる」・「もらえる」の否定形
場面②：親しくないクラスメートにノートを借りる

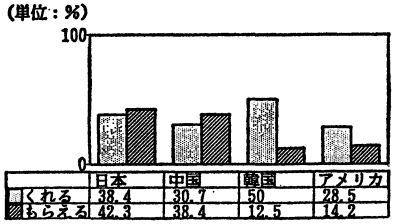


Graf.6：「常体」・「丁寧体」
場面②：親しくないクラスメートにノートを借りる

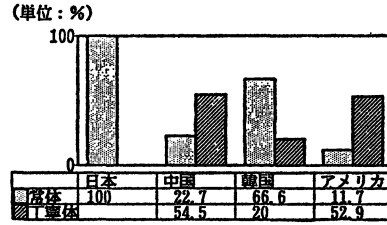


日本人話者の場合は、親しいクラスメートにノートを借りる時に「くれる」の否定形が比較的に多く使用された表現であったのに対して、親しくないクラスメートの場面では、「くれる」の否定形よりも「もらえる」[7]の否定形が多く使われている。場面⑥では、聞き手が親しい友人であるに

Graf.7：「くれる」・「もらえる」の否定形　場面⑥：親しい友達に5万円を借りる



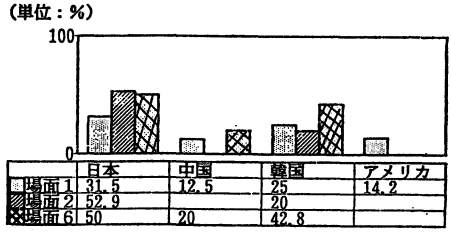
Graf.8：「常体」・「丁寧体」　場面⑥：親しい友達に5万円を借りる



もかかわらず、「くれる」ではなく、もっと丁寧度の高い「もらえる」の否定形が多く見られた。これは、ノートより5万円の方が負担が高くなるためであろうと思われる。

外国人学習者の場合は、同じ状況で、「くれる」から「もらえる」への切り替えではなく、「常体」から「丁寧体」への切り替えが一般的に使われるストラテジーである（グラフ4、6、8を参照）。ただし、その中で韓国人学習者は、親しくないクラスメート以外の場面では、「常体」の方を多く使用している。つまり、日本人に近い結果が得られたわけである。これは、母語からの転移によるものだと思われる。韓国人学習者によれば、韓国語にも「常体」と「丁寧体」に相当する表現があり、その使い分けは日本語の「常体」と「丁寧体」の使い分けと基本的に違わないとのことで

Graf.9：「くれる」・「もらえる」＋（か）なぁ・（か）しら　場面①親しいクラスメート　場面②：親しくないクラスメート　場面⑥：親しい友達



ある。

全体として、日本人話者は場面によって語形を切り替えるのに対して、学習者は語形ではなく、もっと単純な「常体」と「丁寧体」との切り替えを行っていると言えそうである。

なお、聞き手が同等の人である場面では、「くれる」と「もらえる」を用いる表現が出てくる傾向が見られた（グラフ3、5、7を参照）が、これらの表現には「(か)なぁ」・「(か)しら」というぼかし表現がついていることがあった。

(14)（…）本当に済まないけど、必ず返すから、お金貸してもらえないかなぁ。（NM7、場面10）

すなわち、「依頼表現」の後ろに「(か)なぁ」、あるいは「(か)しら」をつけることによって、依頼を柔らかくすることができる。ぼかし表現は、コミュニケーションのために絶対に必要な表現である訳ではないので、外国人学習者の回答には頻繁に出てこないだろうと推測した。G. Lakoff を引用すると、ぼかし表現は発話行為の中心になっている表現の周辺にある要素（peripherical members）であるため、言語習得の過程では最後に習得されるというのである（G. Lakoff, 1972)。これを外国人学習者の場合に応用すれば、依頼表現（くれる、もらえるなど）とともにぼかし表現を使う割合は高くはないと思われる。

日本人話者の回答に「(か)なぁ」・「(か)しら」のぼかし表現がついている場合がかなり多かった。特に、聞き手が親しくないクラスメートである場面②とお金を借りる場面⑥（負担の高い依頼の場面）で最も多く見られた。つまり、頼みにくい時に、話者は依頼をぼかす必要性を感じるのだと思われる。

外国人学習者の場合には、予想した通り、「(か)なぁ」を使ったインフ

ォーマントは少なかった。ぼかし表現は普通教室内で教えられないから、その学習が遅れるのであろう。場面①、②、⑥、3つの場面を合わせて、依頼の後ろに「かなぁ」をつけた人は54人中7人（12.9%）しかいなかった。そのインフォーマントの属性を調べたところ、全員大学の専攻が日本語と日本文化に関係しているという共通点があった。しかし、日本での滞在期間はインフォーマントによっていろいろであった。つまり、今回の結果を見た限りでは、単に日本での滞在期間という要因ではなく、学習者の研究分野も大事な要因となっていると思われる。日本語に直接かかわるテーマを専攻している学習者の日本語の方が日本人話者の日本語により近づくのであろう。

6. ま　と　め

インフォーマントの回答から明らかになったポイントをまとめると次のようになる。

1．親疎関係が要因である場面では、日本人話者の場合、聞き手との親しさの度合によって、依頼表現の形式（語形）を切り替えるが、依頼表現以外のストラテジーはほとんど切り替えない。それに対して、中国人とアメリカ人学習者の場合、語形よりも「常体」と「丁寧体」との間で切り替える人のほうが多い。

2．聞き手が目上の人である場面では、日本人話者と外国人学習者、どちらの回答においてもストラテジーの切り替えが少なくなる傾向が見られる。そして、聞き手が同等の者である場面よりも、「願望表現」の使用頻度が高い。

3．依頼の負担が高い場面における結果は、聞き手が親しくないクラスメートの場面の結果に近い。日本人話者と韓国人学習者の回答では、ある

語形からもっと丁寧さの高い語形への切り替えが多く見られ、中国人とアメリカ人学習者の回答では語形よりも、「常体」から「丁寧体」への切り替えが多い。

4．一般的に言うと、韓国人学習者の回答は、中国人学習者とアメリカ人学習者の回答に見られる特徴から離れており、日本人話者のストラテジーに近い傾向が認められる。依頼発話行為の中心である「依頼表現」を分析した限りでは、母語からの転移が依頼のストラテジーの使い分けにおける重要な要因であるとみなされる。英語と中国語の待遇表現体系が日本語の待遇表現体系と非常に異なり、それが依頼のストラテジーの選択に影響を与えている。一方、韓国語は最も日本語に近い言語であるため、聞き手におけるストラテジーの使い分けは日本人に近いと思われる。ただし、母語からの転移以外の原因も見られた。なお、依頼表現の後にぼかし表現を使った学習者は全体的に少なかった。ここでは、転移よりも学習者の専門分野、日本語学習歴、勉学の目的などの要因の方がその表現の使用に影響を与えるのではないかと考えられる。

今回は学習者の母語に注目して分析したが、今後は、学習者の母語以外の属性（日本語学習歴、日本語を習った方法など）をもっと深く調べる必要があろう。

注

1）次のように各インフォーマントに記号を与えた（アルファベット＋番号）。

NM ── 日本人・男性	NF ── 日本人・女性
CM ── 中国人・男性	CF ── 中国人・女性
KM ── 韓国人・男性	KF ── 韓国人・女性
AM ── アメリカ人・男性	AF ── アメリカ人・女性

2）「直接的依頼表現」は命令形を含んでいる。

3）発話行為において話し手が何を意図するかということ。

4）Vは動詞のことである。

5) 「＊」は外国人学習者による誤用を示している。
6) この結果はグラフで示されていない。
7) 井出1986によれば、日本語の「ヤリモライ」表現の丁寧度は次の順になる（「＞」の左側にある表現に対して、右側にある表現の丁寧度が高い。）
「くれる」＞「もらえる」＞「くださる」＞「いただける」

参考文献

BLUM-KULKA, S. (1989). *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.

BROWN, P. and S. Levinson. (1978). *Politeness — Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

後藤明美 (1982). 「日本人と外国人表現と行動」『言語の社会性と習得』文化評論出版

井出祥子 (1986). 『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂.

川成美香 (1985). 「要求表現に見られる丁寧度の男女差」『社会の中の言語』文化評論出版.

LAKOFF, G. (1972). "Hedges: A Study in Meaning and the Logic of Fuzzy Concepts". In *Papers from the 8th Regional Meeting*. Chicago: Chicago Linguistic Society. pp. 183–228.

LEECH, G. (1983). *The Principles of Pragmatics*. New York: Longman.

ネウストプニー・J. V. (1982). 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書

SEARLE, J. R. (1969). *Speech Acts — An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

アンケート調査に御協力くださった先生方、学生の皆様に深く感謝いたします。更には、御指導くださった大阪大学・日本学科の先生方に心よりお礼申し上げます。（92・7・31）

（大学院後期課程学生）

SUMMARIES

On the Forming of Jinsai's Understanding of "Shitan no Kokoro"

Yoko MORIKAWA

This paper is an analysis of the formation of the thought of Ito Jinsai, on the basis of his understanding of "Shitan no Kokoro (the heart of the four beginnings)". Here I inquire into Jinsai's idea of "Shitan no Kokoro", comparing it with Chu Hsi's interpretation, and clarify its significance for the forming of the thought of Jinsai.

Jinsai formed his own thought in contrast to Neo-Confucianism of Chu Hsi, but this process was not easy. While he wanted to criticize Neo-Confucianism, he could not get out of the framework of it perfectly. This understanding of "Shitan no Kokoro" serves both as an important key to Jinsai's criticism of Neo-Confucianism and as a typical evidence of the difficulty of forming of his thought. Therefore it shows us the process of the formation of Jinsai's thought.

Les transformations des études japonaises en Pologne

Malgorzata DUTKA

Depuis quelques années, on peut observer un rapide développement des recherches scientifiques sur le Japon. Il existe aussi des théories classifiant ces recherches en regard du style intellectuel, du paradigme ou de la fonction.

Cet article a pour objet de présenter l'histoire des études japonaises en Pologne et de déterminer des conditions qui les caractérisent.

Le début des études japonaises remonte à 1919, dès que la Pologne a regagné son independance. Il y avait alors un cours

de japonais à l'Université de Varsovie, mais la fondation de la section japonaise n'a eu lieu qu'après la deuxième guerre mondiale.

Les études japonaises en Pologne socialiste se sont developpées dans le cadre limité par le systéme d'État et la contradiction entre l'Est et l'Ouest. Il est donc possible de dire que leur caractère philologique était determiné surtout par les agents sociaux et politiques. Toutefois, une transformation méthodologique s'est produite en Pologne comme dans les autres pays européens.

Les réformes du système politique commencées en 1989 ont influencé aussi la situation des études japonaises. Maintenant, il semble que le développement de ce domaine soit enfin libre de limitations nonscientifiques.

Differences in the Evaluations of Tokyo and Osaka Judges of Identical Phonetic Materials

Satoshi TOKI

The results of an experiment in which 30 judges from Tokyo and 30 from Osaka heard the same phonetic material revealed differences in their perceptions of the locations of sentence foci. Judges heard tapes of speakers from Tokyo, Osaka, Thailand and the U.S. reading wh-questions, but there are differences in the ways Tokyo and Osaka speakers show emphasis in sentences. Listeners who are used to hearing these kinds of emphasis come to expect the appropriate emphasis, and it follows that these expectations will cause these listeners to have slightly different standards for judging the location of the emphasis. Results showed that judges differed not only in the way they judged Japanese readers, but Thai and U.S. readers as well. This indicates the possibility that there are slight differences in the ways that Japanese language teachers from different regions evaluate the phonetic expression of Japanese language learners.

On the Concept of "Baroque City"—Mainly in the Case of Salzburg—

Toshi KANAI

The concept "Baroque City" is not necessarily a distinctive one, but I take up Salzburg City as its example here, and examine its characteristics by utilizing some studies of it up to the present.

This city, which is famous for a typical Bishop City, was drastically changed according to the plan of Archbishop Wolf Dietrich von Raitenau (1587-1612), and the prototype of the present city appeared. He swept away graveyards, public architectures and houses of inhabitants around the Dome, and made up some squares instead of them. The result of this is that the perspective inside the city became much better, and that the magnificence of the Dome was strengthened.

Such drastic transformation of the plan would be achieved by the combination of the supreme authority of the city governor and the strong economic power of the city. So, for the study we need not only the morphological analysis of the city plan, but also various results in the field of socio-economic history. I am sure such approach will make it possible to get more persuasive interpretations of this issue.

On "Judgment of Possibility" in Epistemic Modality

Tomohiro MIYAKE

The aim of this paper is to describe explicitly the meaning represented by the modal form "KAMOSHIRENAI", and to lay the foundations of systematic description of Epistemic Modality in Japanese.

The meaning represented by KAMOSHIRENAI is generalized

as "Recognizing the possibility that the proposition is ture." We call this "Judgment of Possibility".

"Judgment of Possibility" is to be discriminated from other subtypes of Epistemic Modality such as "Conjecture" (represented by DAROO etc.), "Evidential" (represented by RASHII etc.), "Conviction" (represented by NICHIGAINAI etc.).

To clarify this point, we examine two cases: when two contradictory propositions co-occur and when the proposition shows the speaker's volitional action. In these cases, only the form that represents "Judgment of Possibility" is possible and the form that represents the other subtypes of Epistemic Modality is impossible.

The Use of Request Strategies by Learners of Japanese as a Second Language : A Sociolinguistic Approach

Ellen NAKAMIZU

This paper analyses request speech acts performed by foreign students of Japanese language. It is particularly concerned with the differences between the request strategies used by Japanese native speakers and those used by foreign students. A group of foreign students from China, Korea and America studying in Japanese universities were asked to answer a questionnaire where request situations were given. In each situation the relationship (social distance, power) between the speaker and the interlocutor and the burden of the request were changed. According to these factors, the request strategies used by the foreign students were analysed.

Transfer from the student's mother tongue is undoubtfully one of the main causes for the difference found between the request strategies used by foreign students and native speakers of Japanese. However, it is possible that other factors such as field of study, Japanese learning background, and the purpose

of studying Japanese also influence the learners' performance of speech acts.